opusdei.org

急がば回れ

「当時の子供たちと同じように、闘牛士や医者や消防士にあこがれていましたが、それと同時に、いつの日か日本へ旅することを夢見ていました。」

2009/07/06

私は、1955年バリャドリードで、9 人兄弟の6番目として生まれました。父は空軍パイロットで、母は主婦でした。決して裕福とは言えない両親は、いつも子どもたちのことを優先していました。大きくなって気 づいたのですが、給料が月末になっても届かない時などは、私たちに十分食べさせるために、自分たちの食事を減らすことがしばしばあったようです。

小さな時から日本へのあこがれがあ りました。どうしてかは分かりませ んが、学校で聖フランシスコ・ザビ エルのことを聞いていたことと関係 があるかもしれません。両親は、私 をカトリックの学校へ通わせていま した。最初は修道女たちが経営する ラ・アスンシオンという学校で、後 に男子修道士のラ・サジェという学 校へ通いました。子供の頃、遊びの 中で、国を選ぶような時には、私は いつも日本を選んでいました。たと えば、当時はやっていたミニカーの レースでは、私は自分が持っていた 2台の車に、「九州」と「琉球」と いう名前を付けたことを覚えていま す。当時の子供たちと同じように、 私も闘牛士や医者や消防士にあこが

れていましたが、それと同時に、 「侍」に出会うため、いつの日か日 本へ旅することを夢見ていました。

年月がたち、私のその夢は完全に忘 れ去られていました。父はパイロッ トでしたので、しばしば転勤しまし たが、家族を伴って行きました。私 の医学部入学がカディスで、卒業が マドリードなのはそのためです。23 歳の時、新しい環境に慣れるため、 母は私を彼女の友人の息子・ヘスー スに紹介してくれました。彼も医学 生でした。ヘスースは私をオプス・ デイのセンターへ連れて行ってくれ ました。しばらく通った後、12月8 日にオプス・デイのメンバーとなり ました。

最終学年であった1982年に、当時のオプス・デイ属人区長が、私に日本へ行く気がないか自由に決めるように、と話されました。医者として働けないかもしれないと思いました

が、勇気を出して「はい」と応えま した。一方では小さいときからの夢 が、聖ホセマリアの日本への特別な 愛情と相まってよみがえり、次第に 大きくなっていきました。自分の夢 を変更することは決して特別なこと ではありません。多くの人が、正当 な理由により仕事を辞めたり、転勤 したりするのをしばしば見てきまし た。例えば、私の姉は、子どもが喘 息だという理由で、カナリアからセ ビリアへ転居しました。近所の山本 さんは、親が始めた塾を継ぐため に、私のように医師としての仕事を 辞めました。

私の両親は、私の門出を祝福してくれただけでなく、ほんの少し嫉妬を 感じていたようです。母は私に、

「なんて幸運なんでしょう。あなたがここに残って家の仕事をして、私が代わりに行ったらどうかしら」というようなことを言いました。そして、通常数ヶ月かかるビザを2週間

で取得してくれました。というの は、母の学生時代の友人が、日本大 使を知っていたからです。

そのときからもう25年以上も日本にいるのです。それは、「国内の」冒険でした。というのは、私の適応の前に立ちはだかった敵は、「侍」でも「忍者」でもなく、言葉や箸やスープの中の海草、スリッパで歩くこと、といったことだったからです。

スペイン語の教師としてのビザで来 日しましたが、一人の生徒も見ども ることはできませんでした。子教 とはできませんでした。子教 をために、英語の集中コースを るために、英語した。この一 は3年続きましたが、子ども というのは、子どとと は単純で、彼らから多くのとと は単れて、 がました。 1995年に神戸を破壊した 地震によって、 私はクラスと生徒を 失ってしまいました。幸い、けがが、家けたしたが、家けたしたが、家けたでしたが、家けたのに打撃をに「打撃をにしたができた。そのではないな」とは事をおれてでもいる。とは事をおれてでもがでもがってからでもができれてのではないでもがでもがでからでは、と国りともに近づける手段とはいる手段とはいる手段とができないに喜びのにある。といる。といるは、本当に声がでは、本当に声がでは、本当に声ができない。

私は日本人から多くのことを学びました。それは、秩序、細やかなす接し方、時間厳守といったことですが、それに「人の話を良く聴く」ということを付け加えたいと思います。うでも、それを私が身につけたかどよりも話すことの方がたやすいからです。しばしば、相手が

「はい、はい」と言う前に話してしまします。

私には多くの、良い友人がいます。 カズオは、最初の英語の集中コース で知り合った、最初の頃からの友人 です。彼は私のために恋人を一生懸 命探そうとしてくれていましたの で、彼に自分がヌメラリーであるこ とを説明し、よく理解してくれまし た。ミチオは建築家です。彼の息子 のハレは、誕生日にプレゼントして もらった電車のおもちゃで遊ぶため に、私を家に招いてくれました。彼 とお父さんと一緒に半日遊びまし た。そのおかげで、お父さんととて も仲良しになりました。彼は聖ホセ マリアに大きな信心を持っていま す。毎晩寝る前に、奥さんと彼に祈 り、多くのお恵みを受けることがで きました。いつの日か、改心という 大きなお恵みに与ることを確信して います。

他にも、大学の先生や学生たち、あ るいは日本を旅行する間に知り合っ た友人たちがいます。数日前、その 中の一人が、どうして日本に来たの かと私に尋ねました。彼に答えたの は、最初は子どもの時の夢だったこ と、後にキリスト者の家庭で教育を 受けたある若い聖人を模倣したいと いう望みだったこと、そして長年す ごしてきた今、私がここにいるのは 人に仕えるためであることがより はっきり見えるようになってきたこ とです。友人をキリスト教信仰に近 づける道具としても、よく仕えるよ う努力しています。

日本のように、大多数がキリスト者でない国での使徒職を評価するためには、楽観的であるべきだと思います。大きな変化はゆっくりと起こります。日本では「急がば回れ」と言います。多くの徳を持ったこの国の人たちに信仰を広めたいと急ぐのは

当然ですが、同時に忍耐も必要で す。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ji-gabahui-re/ (2025/11/21)